

って大垣は城下町としての機能を失い、行政機能も失った。

現在大垣市は西濃地域において人口、商業、工業の点で第一の都市である。研究の結果としては次のことが言える。

- (1) 行政において西濃地域は大垣地域、揖斐地域の2つにわけられ、大垣市は揖斐郡を除く大垣地域にある。
- (2) 通勤通学者数からみると大垣市の吸引力の及ぶ範囲は市の西部にあると言え、名古屋市、岐阜市へ地理的にまた交通上近い南部と北部には及ばなくなる。
- (3) 商圏からみると、西濃地域の中部が大垣市の支配下にあると言える。その商店数と大型店数において他の郡部より大きく優位にある。が、名古屋市、岐阜市の商業力が西濃地域に入りこみ、大垣市の商圏の拡大を押さえている。

故に大垣市は西濃地域において市周辺の町村、全体からみれば中部で都市圏を形成している。西濃地域の北部と南部は他の市の都市圏に入っているが、それは名古屋市、岐阜市の商業規模の大きさと、北部と南部を通る交通が理由としてあげられる。

次に工業であるが、大垣市は中京工業地帯の一端を担う工業都市であり、また、西濃地域全体がそうであると言える。明治末から繊維工業都市として歩み続けた大垣市も、戦後、製造品出荷額からみると、繊維の比重が軽くなり続けている。例えば繊維の割合は昭和26年71.4%、昭和40年50.7%、昭和50年30.2%となっている。これは西濃地域全体の傾向でもあり、大垣市を中心とした繊維工業はその位置が変化しつつある。他の工業、特に化学、金属機械工業の出荷額が増加し、多種多様な工業都市になっているといえる。

島根県仁多郡鳥上地区における元たたら地帯の地理学的考察

村 上 郷 子

古代から昭和初期まで、中国山地風化花崗岩地帯ではたたら製鉄が行われていたが、これが現在の、斐伊川を媒介として中国山地から下流平野までの出雲地方一帯に与えた影響は自然・人文両面にわたって多大なものである。私は、斐伊川の最上流であり最後までたたら製鉄を行っていた仁多郡横田町内の鳥上地区をフィールドに選び、斐伊川下流の簸川平野、出雲地方一帯、そして島根県全体も含めながら、第I章自然では地形変化、第II章人文面では、集落、農牧林業に与えたたたらの影響、そして第III章では、たたらの歴史と現在のたたら操業、を中心として、現地での聞きとりと文献調査、そして12月上旬の全国たたら研究会の講演と巡検などからまとめてみた。

鉄穴流しによる地形の変化は、上流では鉄穴場での山腹の切り崩しであるが、大変花崗岩風化の進んだ山地であるので、数10mは山を削っている。また下流地域では谷が流砂によって埋積され、新田造成につながった。横田の水田は、ほとんど鉄穴流しによってできたものである。埋積地が畑となり水田となるには60年ぐらいかかった。また、斐伊川を流れた砂が河口に簸川平野を作ったことも大きい。江戸時代の河口部での洪水と流路変遷、簸川平野の拡大はすさまじく、30年で20haを作った記録

も残っている。

集落の発生は、たたら師のまわりに鉄穴流し、木炭生産、たたら吹き、鍛冶などの労働者が住みついたことに始まる。株小作の発生も鉄師のもとで難民が収容されていったことに始まる。農地解放によって田つきの山である採草地（柴草山）は田と共に解放されたが、農民が薪炭利用していた山は地主のもとにとどまった。中国山地放牧地帯の典型として鳥上の入会的共同牧場の分布変遷をみたが、昭和40年頃までは個人牧場・企業的牧場が増えて発展が期待されていたが、現在では過疎化による労働力の減少、役牛から肉牛という生産目的の変化により、山地放牧はほとんど行なわれていない。農業は水稻プラス畜産の型だが、水稻にウェートが高く、畜産農家は減少している。林相は広葉樹林が多く、また私有林がほとんどであるが、鳥上には大山林地主はいない。県内の他の地方では鉄師が今も大山林地主になっているが、ここはそうではなかったのは、最後までたたらに固執して造林を戦後までしなかったこと、したがってたたらをやめてからの山林利用として、用材林となる斜葉樹がなく、財産を築けなくなり落ちぶれていったためである。たたらに固執したため時勢に乗り遅れ、また逆に時勢に遅れていたからたたらに固執していたとも言える。

砂鉄採取はその後日立金属によって鳥上羽内谷鉾山で続けられている。たたら製鉄の方は、いわゆる鉄師によるものは大正14年に鳥上の鉄師が島根で最後の火を消した。その後東京の日本刀鍛錬会の鉾が昭和8～20年、また日本美術刀剣保存協会の鉾が昭和52年から始まったが、これは文化財として伝統技術の保存を目的としている。したがって地元の産業には影響はないのだが、これや遺跡を見学する人が全国から集まり始め、ここに再び、たたらによって鳥上が注目を集めた。過疎地と一言では片づけられない大きな文化財を持った山村である。

藤 沢 市 の 商 業

森 口 由 美

東京から約50Km、横浜から約30Kmの位置にある藤沢市は、昭和40年頃急激に都市化し、東京の近郊都市としての性格を強める一方、独立湘南都市としての一面もまだ残している。

さて、この藤沢市に、最近多くの大型店が出店し、大きな変容をとげたと聞いた。実際に、藤沢市商業が、どの程度の、どのような内容の発展をなしたか考察する事によって、発展の結果、藤沢市の中心性が高まったかどうかを調べてみた。

そのために、まず藤沢市商業の発展を、神奈川県諸都市と比較しつつ、統計的に検討した。藤沢市は、かつては卸売の中心地であったが、現在、卸売業はあまりふるわず、小売商業都市である。その小売業は、人口一人当たり小売年間販売額59.7万円/人で、県下第3位であり、しかも、昭和45～51年にかけてのその増加率は150%以上であり、県で最高である。ただし、小売商店数の増加は昭和40年頃をピークとして、下り坂であり、最近はあまりふえていない、この事は最近の商業発展が大型店の出店という特殊な事情によるものである事を示し、小売販売額における各種商品、大型小売店の非常に高い構成比がそれを裏づける。